

ふくりゆう

発行所 日本下水道文化研究会運営委員会
 発行責任者 谷口尚弘（運営委員会副代表）
 発行年月日 平成8年4月15日
 印刷所 (株)愛甲社
 編集 小松建司 新澤紀明
 春号（通巻4号）

汐留遺跡の上、下水道施設

JR東海道本線の新橋駅から浜松町駅に至る鉄道路線の西隣で、現在、発掘調査が行われている。汐留遺跡だ。この地は、明治初頭には「新橋停車場」があり、江戸時代には脇坂家（龍野藩）、伊達家（仙台藩）、松平家（会津藩）の所有する武家地であった。東京都埋蔵文化財センターでは平成4年以降、当地区の発掘調査を実施していたが、先般、江戸期の上、下水道施設やトイレ遺構を見学する機会に恵まれたので、紙面をお借りし、紹介する。

下水道遺構

旧武家屋敷地内には上、下水道施設が網の目のように張り巡らされていた。これまで見つかった排水溝は「石組溝」と「木組溝」がある。石組溝は間知（けんち）石と呼ばれる三角錐形の加工石で、側を二段以上に積み上げ、底は切り石や板で作られているが、土のままのものもある。石材は安山岩や凝灰岩で、遠く伊豆や真鶴あたりから運搬されてきたものと考えられている。また、木組溝は杭と横板を組んだもの（開渠）と舟板で組んだもの（暗渠）とがあり、水に強いマツやヒノキが使われている。木組溝は石組溝より時代的には古く、徐々に石組溝に変わっていったようだ。

この排水溝は主に雨水を排水するための施設であったと考えられている。東京都埋蔵文化財センターの斉藤進氏は、「これまでの調査から、排水溝には常時水が流れて形跡はなく、汚水より雨水の排除を目的とした施設ではないか」と話している。

台所から出る汚水や洗濯した後の汚水等もちろん排水溝を通して海に排除していたに違いないが、現代人がバケツをひっくり返すような流し方はせず、流した汚水の量は少なかったのではないかと考えられる。それを証明する手掛かりとなる台所や風呂場の遺構は残念ながら現在のところ見つかっていないが、江戸時代の人々は水はこまめに、大切に使用し、汚水をあまり出さなかったことがうかがえる。



トイレ遺構

発掘現場からはトイレ遺構と考えられる埋め桶と埋め甕（かめ）が多数発掘されている。この埋め桶や埋め甕から多量の寄生虫卵が発見されており、し尿を貯えていたものと判断されている。埋め桶は口径約40cm、深さ50cmで、容量は約50%、埋め甕はそれぞれ60~70cm、約240%の大きさである。江戸時代の人々はこの桶や甕に木の板を渡して用を足していたと考えられている。また、埋め桶と埋め甕とは少し離れたところに設置されていることから、斉藤氏は桶は小使用、甕は大使用ではなかったかと推測する。当時、し尿は重要な肥料であり、農民が屋敷に出入りし、野菜等と等価交換に引き取っていたので、し尿は公共用水域に排除されるようなことはなかった。なお、甕は愛知県常滑産である。

上水道遺構

旧屋敷内から「木樋」や「竹樋」が多数発掘されている。この地は、玉川上水系の末端にあたり、玉川上水を木樋や竹樋で分配し、水を得ていた。ここで注目されるのは、水路の途中に「上水桶」と呼ばれる蓋付きの桶を埋設し、ここで上水の水量調節や水路の方向変更を行っていたことで、当時の技術水準の高さには驚かされる。この桶は、もちろん井戸としても利用されていた。

おわりに

汐留遺跡は、江戸期から明治期の遺跡が良好に残存しており、上下水道史上からも注目すべき遺跡である。江戸期の排水システムについてはもちろんであるが、管材料等からも注目される。例えば、明治初年に「新橋停車場」がつけられたこの地から、給水用の陶管や鉄管が多数発掘されているが、発掘された陶管等を詳細に眺めてみると、形状が少しずつ異なっており、短い期間に技術の進歩がうかがえ、これまでよくわかっていなかった管材料の歴史からも参考になる。

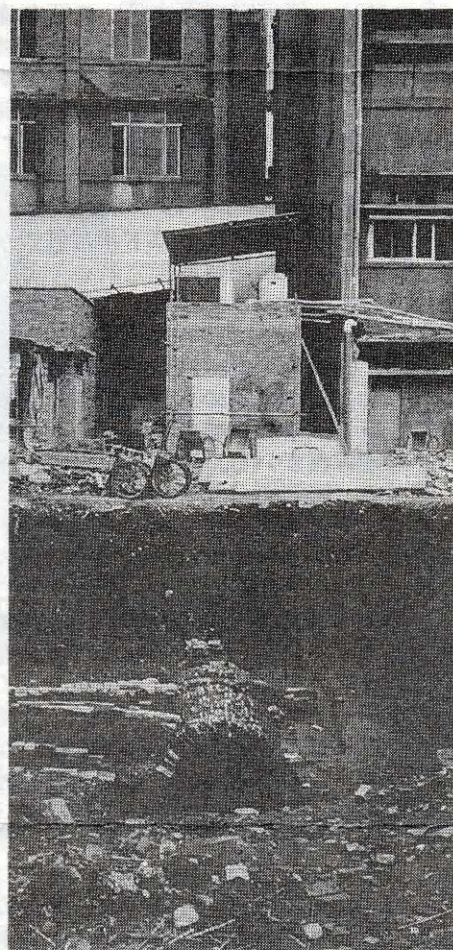
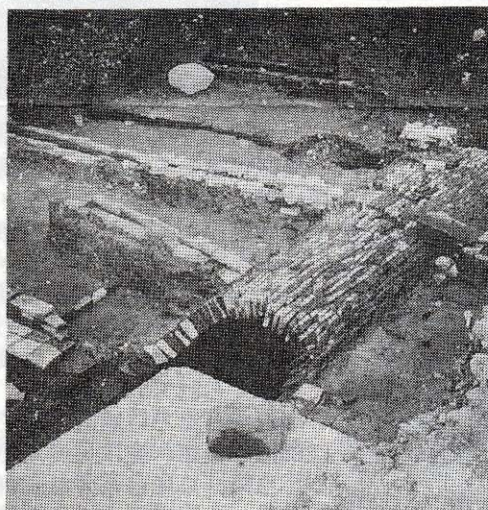
今後の発掘調査にさらに期待がかけられる。

（日本下水道協会 照井 仁）

中国唐宋時代の配水管

神戸大学の神吉先生から昨年（1995年）12月に、「今年、中国の成都で唐宋時代の配水管発見があったことは一部新聞で報道されましたので、ご記憶のことと存じます。愛媛大学教養部の藤田勝久先生（東洋史）が写真を撮っておられ、そのプリント3葉をいただきました。カラーコピーでおくらせて頂きます」というお手紙に添えて、当研究会の皆様にも是非見せていただきたいと思ひまして、会報に掲載することになりました。

- ※ 「成都（チェントウ）」は四川省のほぼ中央に位置する省都です。
- ※ 「唐・宋時代」は618～1279年で、日本では大和時代から鎌倉時代になります。



紹介

神吉先生が建設工学研究所報告一阪神・淡路大震災特集号一の中に「歴史遺産としての近代土木構造物と兵庫県南部地震」というタイトルで報告書を13ページにわたって書かれている。

先生は、近代土木遺産小委員会の地区委員になっており、兵庫、滋賀、岡山、鳥取の各県を担当している。建造年代を江戸末期から昭和戦前に着工または、設計し、戦後建設されたものを対象に調査されており、兵庫県については平成5年から行われていた。今回の地震での被害状況を先生が目撃した状態で書かれており、写真や図などがたくさん盛り込まれ興味深いものとなっている。

ルポ・運営委員会

第8回運営委員会は2月24日(土)に学士会館(神田)にて行われた。朝9時30分から始まった委員会は13名の参加と小平市の松田部長、西山主査を陪席者としてまず、「ふれあい下水道館」の特別展示の変更について話し合われた。

その中で、バルトン撮影の濃尾大地震の写真、関東大震災、阪神・淡路大震災の写真を7月16日から3ヶ月間展示する方向で小平市と打ち合わせをし、進めることになり当研究会は、谷口、栗田、小松が担当することとなった。

また、'96バルトン忌は8月4日(日)に創設10周年改組5周年記念を兼ねた講演会を小平市(場所は未定)で行うべく進めることとした。翌5日に

は、例年の青山霊園でのセレモニーを行う。

続いて、下水文化研究会の将来構想について話し合われ、運営委員6~7名による準備委員会の設置を評議委員会に提案することになった。

その評議委員会は、調整の結果、3月30日(土)に学士会館(本郷)にて行われることとなった。

その他として、
下水文化第8号の発行について、
三大地震の写真集を発行すること、
下水文化叢書第4号の発行、
次回定例研究会の講師の選択
等々が話し合われ午後1時過ぎに散会した。

評議員会報告

平成8年3月30日、学士会館(本郷)において、平成7年度の評議員会が開催された。私レポートの小松、いや、運営委員として初参加、どんな風に行われるのか、胸どきどきものでした。

厳粛の中、稲場代表と西堀評議員代表の開会の辞があり、西堀代表の挨拶の中に、「稲場代表が蒔いた種が地につき、芽を出しすくすくと伸び、若葉もではじめた」と会のことを表していた。

そして、西堀氏を議長として、議案9点の審議に入り、各々の議案説明を担当運営委員が行なわれた。

会員状況の報告(照井委員)正会員316名で、昨年度より6名減少。賛助会員も5会員減少した。と報告された。

(評議員) 会員が減少傾向にあるので、積極的に会員の増強に力を入れていく様にして下さい。

平成7年度の事業報告(谷口代表委員)11件について報告

(評議員) 少ない人数で、これだけの事業をこなすのは大変なことと思います。会は正常に運営されているようです。

関西支部活動報告(稲場代表)3件の事業について報告

運営委員の増員(谷口代表委員)現在10名であるが、さらに6名を増員したい。

(評議員) 増員を認めます。

会報発行状況(小松委員)3回発行の経過説明がされた。

平成7年度会計報告(栗田委員)2月末までの報告がされた。

(評議員) 3月31日の決算が終わってから会計監査を受け、改めて報告して下さい。

平成8年度事業計画(谷口代表委員、稲場代表)10件について提案された。

(評議員) 3つに分けることができます。1つ目は、今までの事業計画と同様です。2つ目は、創設10周年、改組5周年の記念事業。

3つ目は、会の今後の在り方についての検討準備委員会の発足です。大いに結構です。

平成8年度予算案について(栗田委員)

総会の開催について(稲場代表)改組5年たったので、必ずしも軌道に乗ったとはいえないが総会を一度開く時期ではないかとの提案(評議員) 前向きに検討して下さい。

以上で審議は終了しなにかほっとしたものを覚えた短くて長い一日であった。

レポート 小松

今年の運営委員は

運営委員会代表	稲場紀久雄
運営委員会委員長(副代表)	谷口尚弘
運営委員会副委員長(副代表)	木村淳弘
運営委員(会計担当)	栗田彰
(研究会担当)	北川知正
(")	柳下重雄
(会員管理担当)	照井仁
(")	石井明男
(")	山出康洋
(企画担当)	妹崎大二郎
(")	古畑義正
(")	酒井彰
(")	佐野廣一
(関西支部)	中村栄一
(会報担当)	小松建司
(")	新澤紀昭

以上16名です。



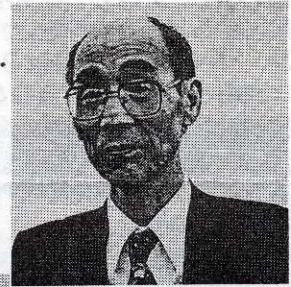
掲示格

- ◎ 環境教材が大変好評で在庫がなくなったので、1000部増刷しました。ご利用ください。
- ◎ 第2回定例研究会が、平成8年2月23日(金)「コンフォート青山」で18時30分～20時まで石田雄弘氏(下水道総合研究所専務理事)を講師として「今、下水道料金を考える」をテーマとして講演した。
- ◎ 関西支部第2回定例研究会は平成8年3月9日(土)13時30分～16時30分まで大阪市水道局水桜会館で行われ、講師として斉藤博康氏(日本水道協会研修・国際部長)を迎え「英国上下水道物語」、勝矢淳雄氏(京都産業大学教授)の「渇水・震災時における市民生活と今後の上下水道の在り方」を講演した。
- ◎ 「小平市のふれあい下水道館」の入場者数が会館2ヶ月で、1万人を突破し、当研究会が企画参加した地下4回の特別展示室の評判がよく、マスコミの取材等で絶賛されている。
- ◎ 第1回定例研究会が5月10日(金)に日本水道協会(新宿)で開催されます。講師として梅沢昭仁氏演題は「南極・昭和基地の人と環境」です。沢山の方の参加をお待ちしております。
- ◎ 100年前の濃尾大地震のバルトン撮影の写真がバルトンのお孫さんである鳥海たへ子さんか

ら借りることができました。この写真を中心に「小平ふれあい下水道館特別展示室」で写真展を行います。期間は、7月17日から3ヶ月間で、ただいま準備に入っています。関東大地震、そして、今回の阪神大震災の写真をお持ちの方で、提供してもよいという方はご一報下さい。写真展のほか、写真集を作る予定です。

連絡先 〒267千葉市緑区土気町1580-66
小松建司 Tel 043-294-6127

◎ 会員の中川義徳氏が平成7年度秋の叙勲・褒章者の表彰で長年にわたる水道事業の発展と行政運営の円滑化に貢献したとして、勲四等瑞宝章を受賞した。



◎ 水とくらしを考える下水道の会(会長阿部康子氏)から、会報「水とくらし」第5号が送られてきた。年2回の発行だそうだが、なかなかシンプルで読みやすい。中に、会員の声のグラムがある。当会報にもこんな投稿があればと思います。

近江の溝

司馬遼太郎氏の「街道をゆく」から

「北小松(琵琶湖西)の」村なかのこの溝は堅牢に石囲いされていて、おそらく何百年経つに相違ないほどに石の面が磨耗していた。石垣や石積みのおまさは、湖西の特徴のひとつである。山の水がわずかな距離を走って湖に落ちる。その水走りの傾斜面に田畑がひろがっているのだが、ところがこの付近の川は目にみえない。この村のなかの溝をのぞいてはみな暗渠になっているのである。この地方のことばではこの田園の暗渠をシヨウズ又キという。よほど上代からの暗渠らしいが、その石組の技術はどこからきたのであろう。」

「街道をゆく」1・湖西のみち

この地方の川の縁には紅殻が塗られているそうです。北小松の村の溝が「石圍いされて」いるということに興味を持ちます。その溝が「何百年経つに相違ないほどに石の面が磨耗していた」というのですから、多分織田信長が安土に城を築いたころに、安土の町にも同じ様な溝が作られていたのではないかと、そんな気がします。

あくりゅうでは原稿募集をしております
どんなに小さいことでも結構です。身近な
話題を送って下さい。

〒267 千葉市緑区土気町7580-66
小松建司まで

編集後記

相棒が、多忙なため、ここ3号ばかり
は、一人で担当している。
今度転勤になったから、手伝えると思う
と言っている。
期待しているのかな?
この号から、春夏秋冬号に変える。この
号は、春号である。
(建)

